



9784910567143

1920070042009

ISBN: 978-4-910567-14-3
C0070 ¥4200E

定価: 本体4,200円+税



Mokusei Publishers
www.mokusei.pub

THE EASTERN OBSERVER
ART AND LITERATURE OF OUR TIME
01

THE EASTERN OBSERVER

ART AND LITERATURE OF OUR TIME



01


Mokusei Publishers

KAWA / 川

PHOTOGRAPHY BY KAWA (CHINSAKU ARAKAWA AND NORIYUKI SEKIKAWA)

WORDS BY KIYO FUJISHIRO





Kawa is a project launched in 2016 by Shinsaku Arakawa and Noriyuki Sekikawa. Both were drawn to skateboarding and photography during their teenage years. The project's name comes from the character kawa ("river"), shared in both of their surnames. Today, Arakawa is based in Kyoto, while Sekikawa continues to work from Kanazawa. Still in search of new "spots," the pair travel fluidly across Japan like a flowing current, moving from place to place. Alongside these journeys, they have documented their travels and daily lives through handmade Japanese-style bound zines known as the "Kawa books." Since 2020, they have continued releasing works regularly through the ongoing Kawa publication series. Drifting across the country in search of new terrain, the two capture fleeting scenes found along the edges of everyday life. The following twelve photographs offer a glimpse into the world preserved within their ever-growing archive.

「川／kawa」は、荒川晋作と関川徳之が2016年にスタートしたプロジェクトだ。二人は、10代の頃にスケートボードと写真に魅了された。チーム名は二人の姓に入っている「川」の字に由来し、荒川は京都を、関川は金沢を拠点に活動を続けている。二人は、今も「スポット」を求めて津々浦々を流れるように旅している。彼らは2016年、そんな自分たちの様子を和綴じにした「川の本」として刊行し、2020年からは定期的に書籍『川』として自分たちの作品をリリースしてきた。そこに写っているのはどんな世界だろう——彼らの膨大なアーカイブから、10点の写真を紹介する。

KAWA

A project launched in 2016 by Shinsaku Arakawa and Noriyuki Sekikawa. Traveling across Japan with skateboards and cameras, the duo continues to document the landscapes they encounter while skating in various locations throughout the country. In June 2026, the project released its latest publication, Kawa 9: Furou (Oakla Publishing).
kawa-img.com @kawa_img

川

2016年にスタートした、荒川晋作と関川徳之によるプロジェクト。スケートボードとカメラを携えて日本全国の様々なスポットでスケボーを楽しみながら、そこで見える風景を記録し続けている。2026年6月にプロジェクトの最新刊『川9 ふろう』（オークラ出版）が刊行された。
kawa-img.com @kawa_img

THE EASTERN OBSERVER

INTRODUCTION

イントロダクション

THE EASTERN OBSERVER is a bilingual journal of art and literature, published in Japanese and English, with a focus on contemporary artistic practice in Japan and across Asia. Alongside the journal, we extend these conversations through newsletters, reading sessions, and audiovisual projects, exploring, with our readers, the signs of worlds yet to come.

『イースタン・オブザーバー』は、日本やアジアの文芸、アート、インタビュアーや批評を日本語と英語で発信するメディアです。ニュースレターやトークセッション、オーディオやビデオシリーズも展開し、読者の皆さまと新しい世界の兆しを探ります。

001

ART

KAWA
SHINSAKU ARAKAWA
NORIYUKI SEKIKAWA

川
荒川晋作
関川徳之

013

INTRODUCTION
イントロダクション

017

ARCHITECTURE

ARCHEOLOGY OF THE FUTURE
LINA GHOTMEH

未来の考古学
リナ・ゴットメ

041

FICTION AND POETRY

“AUTOBIOGRAPHY”
“THE CITY REMEMBERS
FOR AUTHUR YAP”
“THE ELECTRIC GHAZALS”
“HOLIDAY” ALFIAN SA'AT
COMMENTARY HIKARU FUJII

「自伝」
「街は覚えている アーサー・ヤップに捧げる」
「エレクトリック・ガザル」
「休暇」 アルフィアン・サアット
解説 藤井光

065

FILM

UNDERGROUND
KAORI ODA

アンダーグラウンド
小田香

081

FILM

ILHA FORMOSA
KUZOKU

潜行一千里
空族

097

FASHION

**DYEING VIBRANTLY,
OPENING UP A NEW HORIZON**
MITSUKO WATANABE

有松鳴海絞りの新たな地平
渡辺三津子

121

CARTOON

THE SILENT WORLD IS INFINITE
WOSHIBAI

無言の世界に遊ぶ
我是白

145

MUSIC

**EVERYDAY EXPERIENCE
AND MY MUSIC**
MINSU

日々の音楽
ミンズ

161

TANKA

ELEVEN TANKA
TORI-SAN NO MABUTA

短歌十一首
新作および第一歌集「死のやわらかい」より
鳥さんの臉

170

BOOK REVIEW

**READING THESE
PAST TWO OR THREE YEARS**
ATSUSHI HORIBE

ここ2、3年の読み物、あるいは、静かになってから
堀部篤史

178

MUSIC

**THE JAPANESE JAZZ TREND
OVERSEAS**
MITSUTAKA NAGIRA

海外での日本のジャズのトレンド
柳樂光隆

186

DISPATCHES

AMONG OLD BOOKS
KEI WAKABAYASHI

古本の時間
若林恵

195

PHOTOGRAPHY

LIMINAL
AKIRA YAMADA

境界
山田陽

205

NEXT ISSUE
次号予告

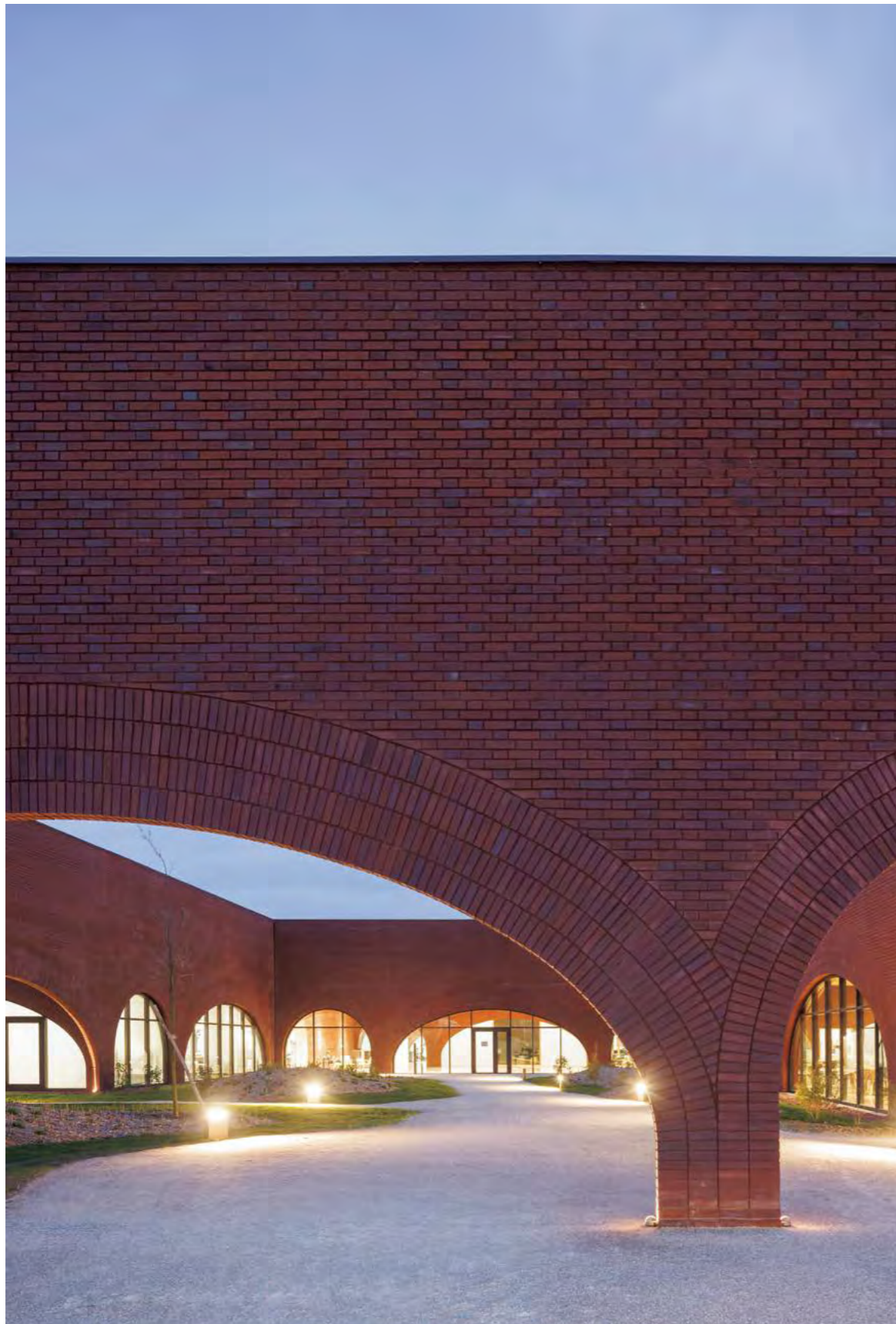
207

EDITOR'S NOTE
エディタース・ノート



LINA GHOTMEH ARCHEOLOGY OF THE FUTURE

INTERVIEW BY KIYO FUJISHIRO PHOTOGRAPHY BY MAKOTO NAKAMORI
TRANSLATION BY YUKI WESTON
PROOFREADING AND EDITING BY NANA KIYOSHIGE



Precise Acts, Ateliers Hermès, Normandy France. © Lina Ghotmeh — Architecture. Photography © Iwan Baan | © Hermès, 2023. 2019-2023.

リナ・ゴットメ——「未来の考古学」

——ゴットメさんは、レバノンで生まれ育ち、今はパリを拠点にして建築家として活躍していらっしゃいます。ご自身のキャリアをどのようにスタートされたのでしょうか？

どうスタートしたか——そうですね、パリに来たことについては、少し偶然が重なったと思います。ベイルート・アメリカン大学で建築の勉強を始め、在学中に海外インターンシップで働く機会を得ました。2001年にジャン・ヌーヴェル（仏、建築家、1945～）の事務所でインターンに参加できることになったのです。レバノンからパリに来たことは、私にとってまったく異なる環境に身を置くことで、驚くべき出会いになりました。街は本当に美しく、あらゆるものが均質に整っていると感じました。ジョルジュ＝ウジェヌ・オスマン（仏、政治家、1809～1891）は都市に一種の持続性をもたらしたとされていますが、パリは実際そういうふう設計されているのだと分かりました。また、この街の歴史は、ベイルートで育った私自身の背景とはまったく対照的でした。そういう環境のもと、ヌーヴェルの事務所で素晴らしい経験をし、学校を卒業しました。そのあと事務所は、ベイルートでのプロジェクトのために私を呼び戻してくれました。パリでしばらく過ごしてから、ベイルートでのプロジェクトを担当するために小さなサテライトチームを作るという計画があったのです。私はインターンシップのときに、カタールのドーハでのプロジェクトに携わった経験もありました。だから「1週間以内にパリに来てほしい」という彼らの依頼に、「分かりました」と答えたのです。それで荷物をまとめてまたパリへやって来ました。6ヶ月の滞在予定でしたが——気がつけば私はここで23年目を迎えていて、自分の建築事務所を構えているというわけです。

——興味深いいきさつですね。レバノンでのプロジェクトについてお伺いしたいのですが、「Stone Garden Housing」（2010-2020）は、日本にあるものとの違いが感じられます。内戦や紛争のせいで、ベイルートでは色々なものが破壊され何も残らないことがある。それでも、石という古来の素材や伝統的な方法を使い、新しい建築を作られていると感じました。そういう方法でプロジェクトを進めてこられた理由は何でしょうか？

ベイルートは、自分のアイデンティティやそこにルーツがあるという私たちの感覚、そしてその場所の歴史について絶えず私たちに問いかけてくる街だと思います。この街は様々な文明の影響を受けていて、豊かな歴史があります。考古学的に発掘をしてみれば、ギリシャ人、フェニキア人、ローマ人の歴史を発見することができ、この街の土地にあるそのような歴史のレイヤーを通して、人間はどういう存在なのかということ私たちは理解し始めます。でも同時に、絶え間ない破壊があるなかで、では「私たちは何者なのか」という問いもまた常にそこにあります。自分たちの祖先が築いた痕跡を繰り返し失うとき、その問いは非常に切実なものになるのです。

私は、「Stone Garden Housing」という建築はまさに私たちの居場所、そして建築物の根源的な部分を語るものだと思

っています。建築は植物のようにある場所から育ってくる、そんなふうにも言えるのではないかと考えています。その土地で育つものなのです。同時にそれは、戦争や破壊、紛争の記憶といった難しい問いに対しての応答になり得るものでもあり、建築を通して物事が建設的であったりインパクトをもたらしたりするものに変化していく可能性についても語るものだと思います。

——ご存じのように、日本でも私たちは様々な破壊や喪失を経験してきました。2025年は終戦から80年の年でした。30年ほど前には阪神・淡路大震災があり、15年前には東日本大震災がありました。なかには津波で全てを失った人もいます。私たち日本人は、アイデンティティについて饒舌に語ることは多くはないかもしれませんが、深い喪失を感じ、それでもそんな難しい状況から回復しようとしている人たちが大勢いるように思います。

どの文化にも、そうした経験について独自の語りがあると思います。レバノンでは、それらはユーモアや皮肉、ときには自虐的なものを通して社会的に語られます。予想に反する反応かもしれませんね。それはまた、生きることへのとても強い欲望や、人々が集うことや祝祭、絶えず何かを作り続けようとする欲望として立ち現れるということなのかもしれません。建築やデザイン、アートはそういった経験に 대응していくための方法になると思います。

私は、日本では、そういった反応は「空間をどう極めるか」という形で表れているように感じます——美をどのように引き出し、自然との関係性をどのように育んでいくか、という方法論です。美が形になり、それを人々が体験していく。その関係性にはある種の強度があると思います。創造性やデザインが、不安定さであったり、環境が破壊され突然全てがゼロに戻されてしまうような瞬間だったりに対して応答するための方法論になっているのです。

——（喪失の）経験のあとに新しく何かを作ることについて、あるいはあなたの建築について語ろうとするとき、そこにあるのは何かを立ち上げていこうという垂直なイメージというよりも、水平に、横につながるような感覚なのではないかと思いました。単に新しいものを建造するというよりは、人々や自然、場所をつなぐようなものなのではないでしょうか。例えば大阪・関西万博（2025）で手がけられた「パーレーンパビリオン」は、日本とパーレーンをつなぐような空間や旅のイメージを作り出していました。

そうですね。私は、建築は「地面」に関わることだと思っています。横のつながりについて言うなら、それは「織る」ということだと思います。自分のやっていることは、いわば編み物をしたり縫い合わせたりして関係性を作っていく作業なのではないかと考えているのです。

オルガ・デ・アマラル（コロンビア、テキスタイル・アーティスト、1932～）の展覧会を手がけたときに、それがはっきり分かりました。彼女の作品を見ていて、布を織ることと建築を作ることとのあいだには、人と人の関係を生み出し、

アルフィアン・サアット
翻訳 藤井光

「自伝」

「街は覚えていて
アーサー・ヤップに捧げる」

「エレクトリック・ガザル」

「休暇」

解説
藤井光

Alfian Sa'at

“Autobiography”

“The City Remembers
For Authur Yap”

“The Electric Ghazals”

“Holiday”

JAPANESE TRANSLATION BY HIKARU FUJII

Commentary

WORDS BY HIKARU FUJII
ENGLISH TRANSLATION BY YUKI WESTON
PROOFREADING BY NANA KIYOSHIGE

is *Rhetorical Territories* (2017), a collaboration with Singapore-based photographer Tom White. Drawing on a series of photographs capturing the landscapes of Singapore's emblematic public housing estates, the book conveys the emptiness of the so-called "kam-pung spirit", once promoted as the ideal ethos underpinning communal life. For each photograph, Alfian makes a short three-line poem, a "rhetorical haiku", responding in pared-down language to images imbued with absence and forging a striking interaction between text and image.

In this volume, three poems are presented in translation from Alfian's second poetry collection, *A History of Amnesia*, first published in 2001 and revised in 2008. In 'Autobiography', memories of childhood, inscribed within the inexorable flow of time, are rendered with both vividness and fragility. By contrast, 'The City Remembers', set against the backdrop of urban life, adopts a cool, detached tone, observing human activity through the eyes of streetlights, trains, traffic signals and elevators. 'The Electric Ghazals', meanwhile, may be regarded as one of Alfian's poetic highlights, bringing together his technical virtuosity across a range of emotions and perspectives along with the traditional Persian-derived poetic form of the ghazal. Each of the twelve ghazals bears thematic titles such as "Oblivion", "Death", or "Happiness", and the language of the ghazal pursues the themes before concluding with an address to "Alfian" in the final couplet. At times playful, at times driven by intense emotion, the words echo between "I" and "you", creating a magical space reminiscent of a hall of mirrors.

At once attentive to Singapore's past and present, Alfian's practice in translation reveals a creativity that remains open to the world. Every line and every word carries a quality that draws the reader in, even as it interrogates the writer's own self and propels them toward further creation. Guided by diversi-

ty and openness, this voice is tied to the Singapore Alfian envisions and will likely flourish in importance, extending beyond Singapore to parts of the world where intolerance and the justification of oppression continue to spread.

ALFIAN SA'AT

Resident Playwright of Wild Rice. His published works include three collections of poetry: "One Fierce Hour", "A History of Amnesia" and "The Invisible Manuscript"; a collection of short stories, "Corridor"; a collection of flash fiction, "Malay Sketches"; and three collections of plays.

HIKARU FUJII

An American literature scholar, translator, and an Associate Professor at the Faculty of Letters and the Graduate School of Humanities and Sociology at The University of Tokyo. In 2017, he received the 3rd Japan Translation Award for his Japanese translation of *All the Light We Cannot See* by Anthony Doerr. His publications include *From the Terminal to the Wasteland: American Literature in the Post-American Era* and *21st Century x American Fiction x Translation Workshop*. He has also translated numerous works into Japanese, including *Harlem Shuffle* by Colson Whitehead.

解説 藤井光

アルフィアン・ビン・サアット (Alfian bin Sa'at) は、1977年生まれ、シンガポールのマレー人作家である。しばしば (シンガポール国内においてすら) 誤解されがちなことであるが、彼の名前にある「サアット」は苗字ではなく、父親のファーストネームであり、彼のフルネームは「サアットの息子アルフィアン」という意味になる。そのため、作家を指す名前としては「アルフィアン」が正しい。そのことについて、アルフィアン自身は、「世界的ステージにおける周辺地域出身であるだけでなく、自分の国においても、マイノリティであれば起こること」だと述べている (2022年発表のエッセイ "Identity, Alphabetically" より)。

名前をめぐるこのエピソードに凝縮されているように、アルフィアン・サアットの創作は、自分とはどのような存在であるのかという問いと無縁ではいられない。シンガポールとは、そこにマレー人として暮らす自分にとって、どのような土地なのか。シンガポール社会の主流たる華人とどのような関係を築いていけばよいのか。シンガポールの国家としての歩みのなかで、自分たちの生きる現在とはどのように位置づけられるのか。そうした問いは、さまざまな形を取りながら、アルフィアンの創作を照らし出している。

アルフィアンはシンガポールのマレー系ムスリムの家庭に生まれた。ただし、一言で「マレー」といっても、作家本人の父方がジャワ人、母方がミンカバウ人であることに示されているように、そのルーツは多様である。家庭ではマレー語、学校では英語を使用する複数言語の環境で育った彼は、やがてその双方の言語での創作を行うようになる。そして何より、アルフィアンの大きな特徴は、演劇・小説・詩という異なる形式での創作をコンスタントに続け、どの形式においてもきわめて高い水準の作品を生み出してみせる多才さにある。加えて、シンガポールにおける複数の言語での文芸がそれぞれに孤立しがちな現状を憂う彼は、翻訳も手掛けている。

これまでに、短編小説集が2冊日本語に翻訳されているアルフィアンだが、早熟なキャリアにおいて、彼がもっともコンスタントに作品を発表し続けている分野は演劇である。シンガポールの名門校であるラッフルズ・ジュニアカレッジに在籍していた10代のころから演劇作品を発表していた彼は、早くから才能を注目されていた。英語とマレー語の両方で創作されるアルフィアンの演劇は、しばしばマレーシアでも公演の機会を得ているほか、現在はシンガポールの劇団 Wild Rice のレジデント作家として活動を続けている。

特に注目すべきは、2015年に発表した『ホテル』(Hotel) と、2018年の『マライの虎』(Tiger of Malaya) だろう。前者は、とあるホテルの一室を舞台として、1915年から2015年まで10年ごとに、その部屋を出入りする人々の姿を通じてシンガポールの歴史を描き出す。2015年に建国50周年を迎えた

シンガポールの「公式な」歴史に対抗すべく、11の場面に分かれ、日本軍兵士やテロ容疑者やマレー人映画スターなど70人弱の登場人物が次々に登場して9つの言語が飛び交う、歌ありギャグあり殺人事件ありの、5時間におたるエンターテインメント大作である。後者は、主に1930年代にマレー半島で活動した日本人盗賊「ハリマオ」こと谷豊を描く1943年公開の日本映画『マライの虎』を題材としている。戦時中の日本で製作されたプロパガンダ映画『マライの虎』は、イギリス人と華人を悪役とし、家族を殺された復讐を誓う谷が、マレー半島からシンガポールを目指す日本軍の進軍を助けるべく、危険な任務に挑んでいく。その映画を、現代の俳優たちがシンガポールの劇場で「再演」しようと試みる過程そのものが、アルフィアンによる『マライの虎』として上演される。マレー語、英語、日本語が飛び交い、複数の国民国家の記憶が交錯する空間を、アルフィアンはつねにユーモアを交えて舞台に出現させてみせる。『マライの虎』は、2023年10月の東京芸術祭にて、上演とトークイベントが開催され、作者アルフィアンも参加した。

発表した作品数では演劇が抜きん出ているとはいえ、グローバルな文学の潮流が小説を中心に動いている現在、アルフィアンの日本での知名度にもっとも貢献しているのは、やはり彼の小説の数々である。まとまった形で日本語に翻訳されているのは、『サヤン、シンガポール アルフィアン短編集』(幸節みゆき訳、段々社より2015年刊行)、および『マレー素描集』(拙訳、書肆侃侃房より2021年刊行)である。『サヤン、シンガポール』は、1999年に出版されたアルフィアンの第一短編集 Corridor の全訳であり、訳者あとがきの言葉を借りるなら「シンガポールというハートランドにどこか居心地の悪さを感じている人々」の姿を浮き彫りにする作品集である。『マレー素描集』は、シンガポールのマレー系の人々の姿を描く掌編集であり、社会のあちこちで、自分の居場所はどこにあるのかというマイノリティの自問がこだましている。

単独の短編の翻訳としては、韓国の作家チョン・セランの発案による、アジアの若手作家が共通テーマで書き下ろした短編を一冊の本にまとめたアンソロジー『絶縁』(小学館より2022年刊行) 所収の「妻」が挙げられる。村田沙耶香 (日本)、郝景芳 (中国)、ウィワット・ルートウィワットウォンサー (タイ)、韓麗珠 (香港)、ラシャムジャ (チベット)、グエン・ゴック・トゥ (ベトナム)、連明偉 (台湾) の作品に並んで、アルフィアンの短編「妻」は、40代にさしかかったシンガポールのマレー人夫婦を軸に、夫がかつての恋人と再会したことで日常が大きく変化していく様子を、室内劇のような緊張感とともに描き出している。

アルフィアンは、2022年の京都文学レジデンシーに参加し、

来日した。京都文学レジデンシーは、国内外の作家および翻訳家に、京都に滞在して創作や交流の機会を提供するべく、2021年に始動した。折しも、新型コロナウイルスのパンデミックのさなかであったこともあり、初年度は作家が京都を訪れる形でのレジデンシーは実現しなかった。翌年になって、作家の対面参加が実現した第1弾として、アルフィアンは京都に滞在した（他に、チェコ語作家アンナ・ツィマ、ニュージーランドのマオリ作家ポーラ・モリス、ベルギー作家ユベール・アントワヌ、日本語作家大前栗生、翻訳家エミリー・バリストレーリが参加している）。

レジデンシー期間の終わりを告げるクロージング・イベントとして、朗読が行われる。作家は自作の文章を提供し、その日本語訳が朗読される。アルフィアンは、京都で書いた短い小説を朗読テキストに選んだ。今回訳出した「休暇」(“Holiday”)は、その完全版である。京都でのレジデンシーに参加することになった息子が、病魔を抱えた母親とともに京都を訪れたときのことを語る、短いながらも実にさまざまな情感がこめられた作品である。この朗読を終えた作家は、京都の次の滞在地である、ポーランドのクラクフに向けて旅立っていった。

アルフィアンの創作を語るうえで、もうひとつの文学の形式である詩を無視することはできない。彼は優れた詩人でもあり、1998年の『烈しい一時間』(One Fierce Hour)を皮切りに、2001年の『記憶喪失の歴史』(A History of Amnesia)そして2012年の『目には見えない草稿』(The Invisible Manuscript)と、これまでに3冊の詩集を出版している（いずれも、紙媒体では入手困難なのが惜まれる）。本人が語るところでは、中学校のときに、教材として英語詩のアンソロジーを読み、シェイマス・ヒーニーやフィリップ・ラーキンやシルヴィア・プラスといった詩人の作品に触れたことをきっかけに、詩の世界にのめり込んでいったのだという。小説では内省的で物悲しいトーンが基調となることが多い一方で、詩においては多彩な顔を見せるのが、アルフィアンの特徴である。ダイレクトに政治的な主題が取り上げられることもあり、シンガポール社会でのマイノリティや言論の抑圧を鋭く告発する作品でも知られている。英語圏の作家にはしばしば、詩人としてキャリアを始め、その後小説に完全に移行する例が見られるが（たとえば、ポール・オースターはその典型だろう）、アルフィアンは詩人としての活動をコンスタントに続けている。近年の試みとしては、シンガポール在住の写真家トム・ホワイト(Tom White)との『レトリカル・テリトリーズ』(Rhetorical Territories, 2017年)での共作が挙げられる。シンガポールの代名詞ともいべき集合住宅の風景をとらえた写真の数々から、理想の共同体を支える精神として喧伝された「カンボン精神」の空虚さを伝える写真集である。アルフィアンはそ

の各写真に、「レトリカル・ハイク」として短い三行詩を提供し、空白を抱え込んだ写真に簡素な言語表現で応え、見事な相互作用を生み出している。

今回は、2001年に刊行され、2008年に改訂された第二詩集『記憶喪失の歴史』より、3篇の詩を訳出した。「自伝」(“Autobiography”)では、時の流れの抗いがたさのなかに刻まれた、幼少期の記憶が、あざやかさと儚さをもって描き出されている。一転して、「街は覚えている」(“The City Remembers”)は、都市生活を舞台とし、街灯や電車、信号機やエレベーターの視点から、人間の営みを見つめるクールな作風が選ばれている。そして「エレクトリック・ガザル」(“The Electric Ghazals”)は、さまざまな情感と視点を駆使するアルフィアンの技巧が、ペルシア由来の伝統詩の形式「ガザル」と融合した、この詩人のハイライトともいえる作品である。12のガザルには、それぞれ「忘却」や「死」や「幸福」といった主題が冠され、ガザルの言葉がその主題を追求していき、最後の対句で「アルフィアン」への呼びかけによって締めくくられる。ときにははたすらつぼく、ときには激情に駆られた言葉は、「わたし」と「きみ」のあいだをこだまし、鏡の間のような魔術的空間を作り出してみせるのだ。

シンガポールという土地の過去と現在を見据えると同時に、今回訳出したアルフィアンの作品群からは、彼の創作がつねに外に開かれてもいることが伝わってくる。どの行も、どの言葉も、自己を問いつつも読み手を招き入れるような感覚を宿し、書き手を次の創作に向かわせている。多様さと寛容さに支えられたその声は、アルフィアンが夢見るシンガポールのあるべき姿とつながっているのだらうし、シンガポールだけでなく、他者への不寛容と抑圧の正当化がはびこる世界各地においても、ますます重要になっていくだろう。

アルフィアン・サアット

劇作家、小説家、詩人。劇団Wild Rice(シンガポール)に座付劇作家として数多くの戯曲を提供。著書に、詩集“One Fierce Hour(烈しい一時間)”、“A History of Amnesia(記憶喪失の歴史)”、“The Invisible Manuscript(目には見えない草稿)”のほか、短編小説集『サヤン、シンガポール アルフィアン短編集』(幸節みゆき訳、段々社)、『マレー楽集』(藤井光訳、書肆侃侃房)、戯曲集など。

藤井光

アメリカ文学者・翻訳家。1980年、大阪府生まれ。東京大学文学部・大学院人文社会系研究科准教授。2017年、アンソニー・ドーア『すべての見えない光』で第3回日本翻訳大賞を受賞。著書に『ターミナルから荒地地へ「アメリカ」なき時代のアメリカ文学』(中央公論社)、『21世紀×アメリカ小説×翻訳演習』(研究社)など。コルソン・ホワイトヘッド『ハーレム・シヤッフル』(早川書房)など訳書多数。



アンダーグラウンド

小田香は、ドキュメンタリー映画という枠を超えて、時代の縛りをも振りほどくような見たことのない映像を撮り続け、ベルリン国際映画祭など日本国外でも注目を浴びる気鋭の映像作家である。2024年に公開された最新作は、沖縄戦の痛ましい歴史が刻まれた沖縄のガマをはじめとした日本各地の地下空間に潜りつつ、人々の記憶を世界に向かって詩的に解き放とうとする『Underground アンダーグラウンド』だ。

今作で長編3作目を数えた小田だが、キャリアの初期から知る人ぞ知る存在だった。ハンガリー映画界の巨匠にして鬼才、タル・ベーラの薫陶を受け、炭鉱の奥深くの暗闇と轟音に迫った『鉱 ARAGANE』(2015年)で長編デビュー。長編第2作の『セノーテ』(2019年)で第1回大島渚賞を受賞し、審査を担った坂本龍一や黒沢清らの絶賛を浴びた。

そんな小田が、新境地を切り開いた『Underground アンダーグラウンド』と共に、世界を飛び回っている。2025年、真夏の東京で語ってもらった言葉には、同時代を生きる私たちがきっと共有している“現在”のリアリティーが滲んでいた。



潜行一千里

映像制作集団「空族」は、異端にして正統である。富田克也・相澤虎之助というふたりの映像作家が2004年に結成し、20年以上の歴史を刻んできた空族の映画のほとんどは、アジア、そして富田の地元である山梨を舞台にした劇映画だ。たとえば、富田監督／富田・相澤共同作品である『バンコクナイツ』（2016年）の舞台はタイ・バンコクから東北地方イサーン、そして隣国ラオスへ至り、同様の布陣による『サウダーヂ』（2011年）は山梨・甲府の日常が映像に反映されつつも物語／フィクションとしてつくられた作品である（キャッチフレーズは「土方・移民・ヒップホップ」だ）。そこでは、メガロポリスとしての東京の煌びやかなロケーションも、スタジオ撮影による端正な映像世界も希求されていない。すべて未ソフト化、基本的にはスクリーンでしか見ることができない作品群で、登場人物たちを演じるキャストの多くは地域住民だ。しかし、映画とはそもそもそういうものではなかったか、と彼らは問う。自身の周囲をまず映してみること、それが外部の世界へとつながること——。どの土地でも音楽が鳴り、人々は踊る。と同時に、各地で独自の生活の匂いがあり、歴史の暗部がある。それらをフィクションとして映し出すことの困難と可能性に、体ごとぶつかっていくからこそ、空族の作品は熱い支持を集めている。2026年夏、台湾を舞台にした新作の長編劇映画『蘭芳公司』がクランクイン予定だというのが（タイトルは、1777年～1884年に東南アジア・ボルネオ島に実在した、中国出身の客家人たちによる“アジア初の共和国”を指す）、富田と相澤の目には、いったい何が映っているのだろうか。

transcended the boundaries of traditional craft while remaining relevant to contemporary life. He described the history and regional character of *Arimatsu-Narumi shibori*, and the background of the brand, as “remarkable”. He says it offers a deep story that resonates with culturally curious clientele. What ultimately convinced him, however, was Murase himself, gentle in manner, yet quietly strong. Several years ago, Wako began carrying *suzusan* on another floor. Okubo observed that, even before knowing the brand’s story, many customers reacted instinctively: “The colours are lovely”, they would say. Perhaps that is the most universal point of connection. Before tradition, before technology, there is simply an immediate, intuitive impulse.

In one corner of the pop-up space were objects unrelated to *suzusan*—— items Murase described simply as “things he likes”. Among them were vintage Braun audio devices designed by Dieter Rams, a leading figure in German industrial design. Even within the strict functionalism of his work, there is something undeniably *human* that draws people in. Several of Rams’s Ten Principles for Good Design echo *suzusan*’s philosophy: good design is beautiful and understandable, subtle yet honest, built to last, and crafted with attention to every detail...

At the intersection of modernity and tradition, there is always someone who stirs the heart.

HIROYUKI MURASE

Born in Nagoya in 1982. CEO and Creative Director of *suzusan*. Fifth-generation heir to a family of *Arimatsu-Narumi shibori* artisans. Studied fine art and architecture at the University for the Creative Arts in Surrey and at the Kunstakademie in Germany. Established *suzusan* in 2008. Blends traditional techniques with a contemporary sensibility across clothing, lighting, and home. Actively engaged in regional revitalisation and committed to sustaining and promoting Japanese craftsmanship. www.suzusan.com @suzusan_official

MITSUKO WATANABE

Fashion journalist and consultant. Began her editorial career at Shiseido’s cultural magazine *Hanatsubaki*, where she worked for over a decade. Later contributed to *Figaro Japon* and *ELLE Japon* before joining *Vogue Japan* in 2000. Editor-in-Chief from 2008 to 2021. Independent since 2022. Currently Fashion Features Director at *10 Magazine Japan*. The first book of her as a fashion journalist to be published in 2027. @mitsuko_wtnb

Recent cityscape of Arimatsu with its historical and local architecture



有松鳴海絞りの新たな地平

「*suzusan*(スズサン)」は、400年の歴史をもつ「有松鳴海絞り」の伝統技術をルーツに世界各地でプロダクトを展開している。そこには受け継がれてきた文化を再生するばかりでなく、より豊かに、鮮やかに生まれ変わらせようとする伝統工芸の新たな可能性が満ちている。いま日本の伝統工芸が、新しい価値を生み出すことの意義とは、そしてその哲学とは？キーパーソンである村瀬弘行(CEO兼クリエイティブディレクター)に、渡辺三津子(ファッションジャーナリスト)が訊いた。

ドイツ・デュッセルドルフから「はじめまして」

村瀬弘行と初めて会ったのは、約2年前だった。会ったといってもZoom画面の向こう側で、村瀬はドイツのデュッセルドルフにいた。私は、博報堂によるエデュケーション&研究プログラム機関「UNIVERSITY of CREATIVITY(UoC)」が主催するゼミを担当することになり、村瀬にコンタクトをとったのだ。実際には彼がCEO兼クリエイティブディレクターを務める絞り染めのブランド「*suzusan*(スズサン)」の担当者(東京でビジネスストラテジーを担当する井上彩花)を通してなのだが、詳しい企画書提出の前に「とりあえずお話ししましょう」と村瀬からのリクエストでオンラインミーティングが設定された。パソコン画面越しに現れた彼は、穏やかで気負いなく、静かだが、絞りのように一本の糸がしっかりと通った話し方をするのが印象的だった。デュッセルドルフは村瀬が長年暮らし、スズサンの会社とアトリエ、ショールーム&ショップがある場所だ。ブランドは、この地で2008年にスタートした。

そもそも私が村瀬にコンタクトをとったのは、ゼミのテーマを考えるにあたって、スズサンというブランドがケーススタディとして最適だと考えたからだ。そのテーマとは、「日本発ラグジュアリーの可能性」である。近年、日本の伝統工芸が極めて高い技術を誇りながらも産業として衰退し、後継者不足から廃業に追い込まれるという現実を折につけ耳にすることが多かった。また一方では、欧州のラグジュアリーブランドビジネスがここ2、30年ほどで急成長してきた状況のなかで、「ラグジュアリーとは何なのか」という命題を新たに考察したい、という気持ちが私のなかで日々大きくなっていった。ファッション誌の編集者として長年ラグジュアリーブランドに深く関わってきた私にとって、その問いを探求することはライフワークともいえるものだった。現在のラグジュアリービジネスの約7割が欧州発の企業であるという事実を前に、「日本発ラグジュアリーの可能性」を探ることは、私たちの文化や産業、ひいては未来を考えることなのではないか、と私自

身が思い始めていたのだ。

ゼミの流れとしては、日本の伝統工芸や卓抜した技術を新しい価値として捉え直し、それを世界へと発信し、未来へつなげてゆくことの可能性を考察するのがゴールだった。全6回のゼミを構成するにあたって、“机上”だけの話に終わらせないためには、実際に日本の伝統工芸を革新することでグローバルマーケットのなかで勝負し、「ラグジュアリー」としての存在感を独自の価値観と共に発揮しているブランド、という具体例が必要だった。また、それだけでなく実際の「もの作り」が生まれるその“現場”も体験できることが重要だと感じていた。

リサーチを進めるうちに、以前からしばしば耳にするようになっていた「スズサン」というブランド名が段々とアイデアのなかで大きくなっていった。そして、そのブランドストーリーにおいて何よりも重要なのが、村瀬弘行という存在であることがわかってきた。

村瀬弘行は、愛知県の名古屋市有松で400年にわたって受け継がれる絞り染めの伝統工芸「有松鳴海絞り」に携わる家に生まれる。村瀬はその家業の5代目に当たるが、10代の頃には、絞り染めの伝統産業は消滅の危機にあり、跡を継ぐことはまったく考えずに東京でアートを学ぶことを目指していた。しかし、東京の芸術大学に不合格になったことから日本を飛び出し、イギリスのサリー州ファーンハムのアートカレッジを経て、ドイツのノルトライン＝ヴェストファーレン州デュッセルドルフへと渡り、ここで8年間学ぶ。そして、在学中に寮で同室だった友人とともに、有松鳴海絞りを現代のライフスタイルに適合させたブランド「スズサン」を立ち上げる。家業にまったく無関心だった青年が、なぜそんな人生の“大転換”をしたのか。その謎はこの文章のなかで徐々に語っていくことになるが、その“転換”のなかにこそ、「スズサン」の成功と、日本の伝統工芸が「転生」するための条件が内包されていたといえる。

オンラインでの初めての顔合わせで村瀬は、有松と自分、そしてスズサンの誕生物語をわかりやすく、丁寧に述べた。きっと、何度も、何度も世界中で繰り返し伝えてきたストーリーなのだろうとわかる、



GAME 無言の世界に遊ぶ

中国・上海を拠点に活動するカートゥニスト／イラストレーター、我是白(ウシバイ)の書籍『遊戯』が、中国、アメリカ、フランスに続き日本でも2026年初頭に黒鳥社から発売された。720ページにわたるこの一冊に掲載されているサイレント・コミックは、どれも洗練されたモノクロームの線画で描かれていてミニマルだ。けれども一方で、丸い頭をした顔のないキャラクターが繰り広げるユーモラスで不可解な物語に、私たちはさまざまなことを投影する。ウシバイは『The New Yorker』や『Bloomberg Businessweek』などへの作品提供でも知られ、日本国内では星野源のシングル曲「いきどまり」のジャケットなどでそのイラストを見ることができる。「言葉に慣れていない」と語るこの作家はいま、世界とどう対峙し何を描こうとしているのか？ 来日したウシバイに訊いた。

——来日は初めてですか？

今回で3回目です。最初は2016年に東京に来ました。その次は2025年で、瀬戸内国際芸術祭を観ました。

——ご出身は上海ですか？

生まれも育ちも上海で、仕事もずっと上海です。他のところで暮らしたことはありません。ちなみに生まれは、1988年です。

——中国では、ウシバイさんの世代のことを「〇〇世代」と俗称で呼んだりすることはありますか？

「80后」(バーリンホウ：“80後(はちれいご)”の意)という言いかたがあります。

——中国では、各世代ごとの価値観の違いはあるのでしょうか？

あると思います。例えば、私たち80年代生まれの世代は、70年代生まれの人たちのことを「古い」と思っています。70年代生まれの人たちは、中国の改革開放の初期段階に人格形成を済ませています。80年代以降に生まれた人たちは、70年代生まれの人たちが子供時代を過ごした当時の社会とは違う環境で育っている。外国文化に触れる度合いも違っているので、世代ごとに価値観も異なります。90年代以降に生ま

れた人たちは、きっと80年代生まれの私たちのことをとても古い人たちだと考えているでしょうね。

描き始めた頃

——絵や漫画を描くようになったきっかけは？

大学ではデザインを専攻しましたが、2年生になって将来どんな仕事をすべきかという非常に大きな不安と焦りを感じ始めました。「これからどうしよう」と寮の部屋で2日間真剣に考えて、自分が一番好きで得意なのは絵を描くことだと気がつきました。それで、将来は絵に関することをしようと決めました。大まかな目標を決めて、たくさんの紙を買い込んで授業にも出ずに毎日寮で絵を描くようになりました。インターネットで芸術や絵画、イラストに関して調べているうちに、絵画コミュニティで仲の良い友人や同業者に巡り会うこともできました。そうやって同好の士と交流しながら、残り3年間の大学生活を楽しく過ごしました。大学を卒業したのは2010年ですね。

——当時使っていたSNSは何だったのでしょうか？

「豆瓣」(ドウバン：2005年開設。中国最大級のカルチャーSNS／サイト)です。それから、「涂鸦王国」(トゥーヤー・ワンクォ：“落書き王国”の意)という絵画投稿サイトを使っていました。日本の「pixiv」に似たようなものです。そこでいろんな人と知り合いました。

while staying true to the essence of my music so that I can be proud of my work. Beyond that, I'm not sure what else I'm capable of. Will the day come when I find myself standing on a much bigger stage too? :)

—— **What has been the most challenging period for you in your career so far?**

I think the first half of 2025, was the toughest time for me. The energy I poured into releasing *Me, Stranger* in 2024 seemed to have truly drained me. Going from working under a label to suddenly handling everything on my own was no small feat. I think I experienced a bit of burnout. After putting out all fourteen tracks, it felt as though I'd fired every bullet I had. I was left feeling deeply uncertain. I'm the type of person who doesn't feel at ease unless I have a stockpile of demo tracks saved on my computer. So during the first half of 2025, I focused on making new songs and rebuilding my energy.

In the end, it's always music. Creating music gives me a reason to live, and makes the world feel bright again. It was only after I started making new music that I found the strength to think about promoting last year's album a little more. It's kind of funny, isn't it? :)

—— **What are your plans going forward?**

Someday, I really want to work in the United States. I'd love to buy a truck there, turn it into a "Minsu truck," and travel across all the states while promoting my music — something like a truck tour (this isn't just a dream, by the way. It actually feels like something that could really happen in the near future). To prepare for that, I've already been making

some exciting new songs. I'm not yet sure how I'll be able to share them, but please keep supporting my journey and stay excited for what's to come.

As I mentioned at the beginning, I'm still a newcomer. And at the same time, I carry dreams that feel almost impossibly big. It sometimes feels as though nothing has even begun yet. My confidence that everything will come true has grown faint, but even so, I've decided to keep walking this path. Thank you — thanks to you, I'm able to take another step forward.

MINSU

Singer-songwriter. Winner of the Bronze Prize at the Yoo Jae-ha Music Contest. She officially debuted in 2018. In 2024, she released her first full-length album, *Me, Stranger*. In spring 2026, she will embark on the "Minsu CLUB TOUR 2026."
@ineed_water

BUZZY ROOTS

A web magazine introducing Korean indie music. Launched in 2019 by two music writers, AKARI and IZUMI. The magazine features interviews with Korean artists, information on their performances in Japan, and K-indie charts.
buzzyroots.com @@buzzyroots.tokyo

FUMIHISA MIYATA

Editor and writer specializing in culture, literary, and social issues. Edited and co-authored works include a series of two books about Kaitaro Tsuno, a renowned Japanese editor, published by blkswpn publishers Inc., Japan. He is currently serializing "Yomu wo design suru hito (people designing the act of reading)" in a Japanese literary magazine *Gunzo* (Kodansha Ltd.), and "What is editing?" in a web platform *HILLS LIFE Daily*.
X@editdisco editdisco.blog.jp

日々の音楽

韓国のインディー音楽は、驚くほどにハイクオリティだ。その所以は定かではないが、K-POPが世界的な人気を博し、商業的なシステムを確立するなかで、その波とときにシンクロし、ときに絶妙な距離を保ちながら、魅力的な楽曲を手がけ、演奏するインディー・ミュージシャンたちが数多く存在する。そのなかでも、2010年代後半から現在に至るまでハイセンスな音楽を届け続けるシンガーソングライター・Minsuは、注目すべき存在だ。キャリア初期のシングル「Islet」を歌うインスタグラム動画が100万回再生を記録するなど耳目を引いてきた彼女は、インディー大手のレーベルと契約して活動した後、再び完全な自主制作へと舵を切り、2024年に初のフルアルバムとなる『Me, Stranger』をリリースした。ポップでキュートで、どこか切ない——そんなサウンドは、どんな日常と肌感覚から紡がれているのだろうか。韓国インディー音楽界を日本で追うWEBマガジン・BUZZY ROOTSのAKARIに協力を仰ぎ、胸の内を尋ねたメールインタビューは、同じ時代を生きるひとりの人間の息吹を感じとることができるものとなった。



MUSIC

鳥さんの
瞼
短歌十一首
——新作および第一歌集「死のまわかし」より

Eleven tanka drawn from the debut collection
Tenderness of Death and new works
by contemporary Japanese poet Tori-san no Mabuta
("A Bird's Eyelids")

TRANSLATION BY MIDORI AOYAMA PROOFREADING BY NANA KIYOSHIGE



ters I'd most want to recommend to overseas record lovers.

Now back to the main story. It took an international push to shake things loose domestically as well. As foreign labels moved ahead with vinyl reissues and streaming releases, Japanese record companies began to follow. In 2024, King Records opened up a large chunk of its back catalogue, making early recordings by Sadao Watanabe and Toshiko Akiyoshi from the 1960s available to stream for the first time. Sony followed that same year with Akiyoshi's big-band work, and the year after, Masabumi Kikuchi's *Susto* arrived on streaming services too. By the mid-2020s, the major labels were all moving at once. Ryo Fukui and Hiroshi Suzuki had kicked the door open, and Japanese jazz is

now easier to listen to than it has ever been.

The long inaccessibility of Japanese jazz recordings is also part of why its history has never been properly written down. No book offering a real historical overview has yet been published in Japan — discography guides exist, written from a DJ and record angle, but a coherent history remains unwritten. Now, with the music finally accessible and international recognition growing, the conditions for that to change are there for the first time. There's something so characteristically Japanese about a country being prompted to document its own music history by enthusiasm from abroad. That moment feels close. Whether Japanese jazz becomes something more than a trend will depend on what comes next.

MITSUTAKA NAGIRA

Born in 1979 in Izumo, Shimane Prefecture, Japan. A graduate of Izumo High School and Tokyo Gakugei University. Music critic, interviewer, educator, DJ, and radio personality. His work centers on jazz and its surrounding musical cultures through writing, interviews, lectures, educational programs, curatorial projects, and supervision. Best known for the *Jazz The New Chapter* series, he has devoted himself to tracing the development of 21st-century jazz while situating it within broader histories of music.
 @@elis_ragina X@Ellis_ragiNa

海外での日本のジャズのトレンド

ここ数年、ギタリストの高中正義がとんでもなくブレイクしている。3月にはイギリスのガーディアン紙にロング・インタビューが掲載された。タイトルは「生きているうちに本当にやりたいことをやれ：70代にして第二の波に乗る日本のギターヒーロー、高中正義」。なぜこのような記事がガーディアン紙に掲載されるのかというと、高中は約5000人収容のロンドンのO2アカデミー・ブリクストンでの2夜連続公演を成功させたからだ。記事によると、夏には1万人規模のフェスのヘッドライナーを務めるという。高中正義のストリーミングの再生数はものすごい数字に膨れ上がっており、インスタグラムでは高中のレコードがいかに素晴らしいかを語る海外のレコード好きの動画がいくつも見つかる。その人気はここ数年で一気に加速している。

しかし、これは高中だけの話ではない。2025年11月、EFG ロンドン・ジャズ・フェスティバルでは「Japanese Jazz」という企画が2000人収容のパービカン・センターのホールで行われた。そこには2組のアーティストが出演していた。その一方は矢野顕子で、海外ではシティポップ周辺の文脈も含めて人気が高い。もう一組は森山威男、峰厚介、板橋文夫といったベテランと守谷美由貴、須川崇志によるクインテットだった。つまり、この日のもうひとつの主役は日本のジャズのベテランたちだったということになる。森山や峰、板橋のレコードは今や世界中で人気を獲得している。彼らが参加したレコードは何枚も再発され、現在では新品として世界中で入手可能になっている。当然、ストリーミングの再生数も伸び続けている。

この10年余、世界中のレコード好きの間で「日本のジャズ」が人気を集めている。2010年代後半から日本のジャズの中古レコードの価格は高騰し、ストリーミングの再生数も激増している。それとほぼ同時に、1960年代から1980年代の日本のジャズのレコードが海外のレーベルからリリースされるようになった。山下達郎や大貫妙子をはじめとしたシティポップ、吉村弘をはじめとした環境音楽（アンビエント）などが話題になることも多いが、規模こそ違えど、日本のジャズもレコード市場

ではトレンドであり続けている。先述の例で言えば、高中正義はシティポップとジャズの間領域での人気という位置づけになるだろう。一方で、森山威男、峰厚介、板橋文夫は「日本のジャズ」のトレンドそのものだ。実際、2018年に森山威男『East Plants』、2021年に峰厚介『First』がイギリスのクラブ系レーベルBBEからレコード再発されている。2024年には板橋文夫『Watarase』もフランスのWewantsoundsからレコード再発された。そうした再発の流れを踏まえれば、ロンドン・ジャズ・フェスティバルの観客の一部は「あのレコードのアーティストが来英する」という文脈で受け取っていたと考えられる。

その日本のジャズだが、興味深いのは、今海外で人気が出ているアーティストの多くが、高中正義のように当時リアルタイムで大ヒットしていたスターではないという点にある。むしろ当時そこまでレコードが売れていなかったミュージシャンの作品に人気が集まっている。これはYouTubeなどのストリーミングだけでなく、中古レコード市場がトレンドの牽引役になっていることとも関係している。1960年代末のイギリスでは、DJが希少なソウルやリズム&ブルースのレコードを探してクラブでプレイする「ノーザンソウル」と呼ばれるムーブメントが勃興した。1980年代にはその動きがソウルだけでなくファンクやジャズにまで拡張され、「レアグルーブ」と呼ばれるムーブメントも発生した。イギリスを中心に、こうしたレコードとDJのカルチャーは生まれ続けてきたし、その探索対象も徐々に広がっていった。実際、1980年代にもイギリスでは日本のジャズ

One might say that the shelves of a secondhand book

store are filled entirely with books for which there is no longer any reason that they “must be read now.” Compared with the bustle and clamor of a new bookstore, the storefront of a used bookstore feels uncannily quiet for precisely that reason. Books that have slipped from the current of their age lose what they once had to say as commodities, and are left with no choice but silence.

Of course, this does not mean that such books have become wholly worthless. To lose one’s point of contact with the present does not mean to become valueless. What it means is that the discovery of that value is entrusted entirely to the person standing before the shelves, browsing through used books. It may sound overly grand to say that the buyer’s task is to discover a new presentness within these silent books, to grant them a new voice—but in truth, that is exactly what everyone does when buying secondhand books.

Unlike newly published books, used books do not speak to us about why they should be read now. Precisely for that reason, we must measure the relationship between the book and our present selves with far greater care and delicacy. In order to buy a book that has already lost the reasons it once possessed for being purchased, one has no choice but to search for those reasons within oneself. And those reasons are often so singularly one’s own that they can probably never be shared with anyone else.

Books placed in new bookstores constantly insist upon how many people are reading them. By contrast, books in secondhand bookstores wait for someone to discover them for reasons no outsider could ever fully understand. Though both are selling books, new bookstores and used bookstores speak in completely opposite voices. Put another way, a new bookstore seeks to welcome you as a member of society, whereas a secondhand bookstore asks, rather,

that you estrange yourself from society and become isolated from it. It asks people, deliberately, to step outside the flow of the present moment.

I think that, even as a child, I sensed there was something gentle about that feeling of isolation. Since starting a secondhand bookstore myself, I have once again found myself visiting used bookstores frequently, yet even now I remain largely unmoved by rare editions or expensive collector’s items. Market value always points toward the present moment. The reason I continue to feel drawn instead to books tossed into bargain bins for a hundred yen—books that have already slipped beyond the scales of market value—is perhaps because they allow me to feel the freedom of slipping outside the time called “now.”

KEI WAKABAYASHI

Editor, content director at blkswn publishers in Tokyo, Japan. Began his career on the editorial staff of *Monthly Taiyō* at Heibonsha before working as a freelance editor and later serving as editor-in-chief of the Japanese edition of *WIRED*. In 2018, he co-founded blkswn publishers Inc. His major works include *Democracy of Experimentation* (co-authored with Shigeaki Uno, Chūkō Shinsho), *Opening “The Forgotten Japanese”*: Tsuneichi Miyamoto and the *Democracy of Seken* (co-authored with Akihiro Hatanaka, blkswn publishers), and the edited volume *Next-Generation Government: How to Build a Small Yet Expansive Government* (blkswn publishers), as well as *Farewell, Future* (Iwanami Shoten). He also co-translated *The Seventh Man* by John Berger (blkswn publishers) with Kim Sungwon, among many other edited and translated works. In February 2025, he was appointed deputy director of *TIGER MOUNTAIN*, a secondhand bookstore and gallery that opened in Tokyo’s Toranomon district.

古本の時間

2025年に、たいして深い考えもないまま、自分が所属する会社で古本屋を始めることとなった。店のアイデアは、古本を装丁家ごとに分類して売ってみるという点にあるのだが、取り立てて「装丁」や「デザイン」といったことに強い興味をもっていたわけではない。

むしろ、100円コーナーで投げ売りされているような市場的には無価値な古本も、よくよくそこから情報を取り出してみると、装丁したのが、例えば横尾忠則だったり田中一光だったり、日本のデザイン史に名を燦然と輝かせる巨匠たちだったりすることがままあることから、そういうものを安い値段で探し出してきてデザイナーごとに分類して並べてみたら面白そうし、なんなら儲かるかもしれない、というのがアイデアの発端だった。

難しいのは、これまでの古本の市場には、装丁家やデザイナーの名前から網羅的に本を検索できるような仕組みがほとんどないことだ。過去作品がきちんとアーカイブされ、書籍や展覧会といったかたちで情報がまとめられた一部の著名デザイナーの場合を除くと、ほとんどは、古本屋の店頭で装丁の良さそうな本を手にとって、いちいち装丁家のクレジットを見ていくしか仕入れの方法がない。

とはいえ、それが苦であるかと言えばむしろ逆で、そんな面倒をあえてしたくてやっているというところもある。著名デザイナーのアーカイブを網羅した本を参考に、すでに価値があるとされている本をリスト化して、そのリストを上から順に潰していくようなことも考えたが、それが到底面白いことのように思えず、結局しないままになっている。

どだい、古本というものは出会いがすべてだ。予めウィッシュリストをつくったところで、その本と出会わなければ、いくら欲しかったところでどうしようもない。たしかにインターネットのおかげで、自分が何を探しているのかがわかっていさえすれば、本との出会いは、以前よりはるかにたやすいものになった。自分ももちろん部分的にその恩恵を大いに受けてはいるが、予め用意しておいたリストに従って本を買っていくのは、仕入れというよりも調達に近く、業務として見れば効率的だが、効率的な本屋というものは、それ自体が語義矛盾のようでもある。そもそもそうやって探すことができる本は、すでに価値化されて値段が高いという問題もある。

自分にとっての古本は、結局のところ、本棚の前に身を置き、「そこにあるものしか選べない」という状況のなかで、そのときその場で面白そ

うに思えたものを拾い出すものだ。そこでは、「欲しいもの」は自分のなかに予めあるのではなく、向こうからやってきてはじめて自分の欲しかったものがわかるという現れ方をする。

売れ残りの漫画

小学校の頃に暮らしたのは、海沿いの埋立地につくられた殺風景なニュータウンで、思い出す限り、たいした本屋もない、街とも言えないただの住宅地だった。最寄りのスーパーの前に広場があって、そこに時折古本屋がやってきて古本を並べていたのが、思い返せば小学生だった自分が身近に触れることのできた「文化的」な空間だった。

潔癖で生真面目な両親は、当人気だった最新の漫画類をあまり買ってはくれなかったが、野球やサッカーに関する本や雑誌などには寛容だった。とはいえ新刊の雑誌や漫画などは、そこそこいい値段だったので、小学生の限られた小遣いではそうそう買うことができない。そこで、1冊100円ほどの値段で買うことのできる古本に目が向くことになったのだろう。ある時期、おそらく月に1回だったと思うが、スーパー前の広場に古本屋が出るたびに、顔を出していたのではないかと思う。

最初は野球漫画を買い始めたが、悲しいかな、100円で買うことのできる古本には、当時の流行りのタイトルはほとんど含まれていない。かつては人気だったのかもしれないが、その頃にはすでに顧みられなくなった本のなかから、仕方なく、面白く読めそうなものを物色することとなる。おかげで、『ドカベン』で知られる野球漫画家の水島新司については、その頃もいまもほとんど語られることのない、マイナーな作品まであらかた読み通すこととなった。

小学生には全巻を一気に揃えるようなゆとりはないので、せいぜい数冊ずつ、時間をかけて揃えていったわけだが、そうやって一定期間にわたって買い足すことができたのは、いま思えば、その期間、自分以外にそれを買う人が誰ひとりとしていなかったということでもある。

そんな残り物みたいな漫画でも案外面白く読めたのだから、本の価値なんていうものは、自分次第でどうにでも変えることができるということなのかもしれない。

孤立と中立

そのとき自分が読んでいた漫画が、社会のなかでほとんど無価値に等しいとされているものであることは、小学生の自分も薄々感じていたはずだ。『キャプテン翼』という漫画のおかげで、サッカーが日本でも人気のスポーツになりつつある頃だった。野球は不人気というほどではなかったものの、戦後の高度経済成長のさなか、日本中を沸き立たせた野球への熱狂は、すでにかなり薄らいでいた。

野球人気が全盛だった頃に描かれた熱血漫画は、その絵のタッチからしてすでに暑苦しい、旧時代の遺物のようだった。古本屋の店頭に並んだ野球漫画の、くたびれてうら寂しい雰囲気は、小学生にも届いていた。とはいえ、勃興したてのサッカー漫画はまだ出来立ての新しいジャンルで、古本屋にはまったく並んでいなかった。くたびれた野球漫画しか、買うものがそこにはなかった。

Akira Yamada works across fashion, culture, and sport, though the photographs he continues to make seem increasingly drawn toward something less easily defined. After years spent photographing in both the United States and Japan, Yamada began noticing moments in which the world seen through the viewfinder appeared to lose its certainty. Landscapes dissolved into fragments of memory; distant light carried the feeling of an echo rather than a fixed reality. What emerges in these images are places that feel at once unfamiliar and unmistakably real — suspended somewhere between observation and recollection. The photographs gathered here are part of *Liminal*, an ongoing series in which Yamada traces the quiet instability that exists between worlds.

山田陽は、ファッション、カルチャー、スポーツなど幅広い領域を横断して活動するフォトグラファーだ。アメリカで、日本で、数多くの写真を撮影してきたが、曖昧で、不安定で、何かの響きだけが聞こえてくるような世界が、ファインダー越しに見える気がするところがあるという。そのようなときに撮影された写真には、どこでもないようにも見えながら、やはりリアルに存在する世界が写っている。山田が撮影を続けてきた一連の作品を「境界」シリーズとしてお届けする。

EDITOR'S NOTE

I often think of two critics who shaped the way I think about literature and art: Kazuya Fukuda (1960–2024) and Tadayasu Sakai (1941–). Both were travelers, moving between places, books, exhibitions, and conversations. What they taught was not simply knowledge, but a way of paying attention —to the world, and to the traces people leave within it.

THE EASTERN OBSERVER began as an effort to look at the world with the same attentiveness.

Through writing, art, and dialogue,
we hope to observe the world a little more closely
and to attend to the currents taking shape across Japan and Asia.

A year has passed since this project began.
Thanks to the generosity of our contributors and supporters,
we are pleased to present this inaugural issue.
I hope you enjoy it. As always, we welcome letters.

Kiyo Fujishiro Editor, *THE EASTERN OBSERVER*

この本を刊行する小社をスタートしたのは、
福田和也先生(文芸評論家、1960-2024)と酒井忠康先生(美術評論家、1941-)の
影響によるところが大きいと思います。
お二人は、色々な場所へと旅をして、飲んで食べて人と付き合いながら思索するというスタイルでした。
長年にわたって、そうやって文学や美術の森を歩かれて、
人間の心の奥深いところにある何かに触れられたのだと思います。
この『THE EASTERN OBSERVER』を作ったのは、
日本とアジアにあるそういった「何か」の響きを言葉にして届けたいと思ったからでした。
そして、その言葉を手がかりにして作家や読者の方々と対話しながら、
世界を具体的に眺めてみたいと思ったからでした。
計画を立て始めてからあっという間に1年が経ち、ようやく創刊号を刊行することができます。
多くの方々にお力添えをいただきました。本当にありがとうございます。
本誌を読んでいただいて、お気軽に感想やメッセージをお寄せいただくと嬉しく思います。
そして、次号の計画ももうすぐスタートします。どうぞお楽しみに。

『THE EASTERN OBSERVER』エディター 藤代きよ

THE EASTERN OBSERVER 01

Published on the 25th June 2026
2026年6月25日 第1版1刷発行

Editor
KIYO FUJISHIRO

Contributing editor
FUMIHISA MIYATA

Translators and editorial staff
YUKI WESTON MIKU SUZUKI
NANA KIYOSHIGE

Illustrator (cover)
YUKI UEBO

Art director
KENJI YOSHIDA (TSUMASAKI)

Designer
RIKO YAGUCHI (TSUMASAKI)

DTP operator
TOMOYO TERAKADO (TSUMASAKI)

Editorial advisor
KEI WAKABAYASHI (blkswn publishers Inc.)

Special thanks to
MITSUKO WATANABE

編集
藤代きよ

コントリビューティング・エディター
宮田文久

翻訳／編集スタッフ
ユキ・ウェストン 鈴木未来
清重七菜

イラストレーター (カバー)
YUKI UEBO

アートディレクター
吉田憲司 (ツマサキ)

デザイナー
矢口莉子 (ツマサキ)

DTPオペレーター
寺門朋代 (ツマサキ)

エディトリアル・アドバイザー
若林恵 (黒鳥社)

謝辞
渡辺三津子

Published by
Mokusei Publishers Inc.,
55-1, Hirai-cho, Shimogyo-ku,
Kyoto City, Kyoto, Japan, 6008118.
Tel/Fax: +81 75 600 2401
Website: www.mokusei.pub
Email: books@mokusei.pub

Printed in Japan by
Sannichi Printing Co., Ltd.

発行人
藤代きよ

発行所
株式会社木星社
京都府京都市下京区平居町55番地1
電話/FAX 075-600-2401
ウェブ: www.mokusei.pub
メール: books@mokusei.pub

印刷・製本
株式会社サンニチ印刷

©Mokusei Publishers Inc. 2026 All rights reserved.
No part of this publication may be reproduced, processed, stored electronically,
copied or distributed in any form whatsoever without the written permission of the publisher.

乱丁・落丁本は、送料小社負担でお取り替えいたします。
本誌掲載の写真、イラストレーション、文章、ロゴの無断転載および複製・複製・借用を禁じます。
ISBN 978-4-910567-14-3 C0070 ¥4200E